連載

フィールド・アイ

Field Eye

イタリアから――②

武蔵大学　古村　聖

Mizuki Komura

▨グローバル化と官僚制度

前回はイタリア人の余暇について述べたが，今回はイタリアに渡る移民について書きたいと思う。ヨーロッパでは，EU 域内の労働移動が自由であることもあって外国人の割合が大きい。イタリアも例外ではなく，外国人居住者が 2005 年には 4.6％だったのが，2013 年には 8.3％とほぼ倍増し，人口のおよそ 10 人に 1 人が外国人となっている。2015 年は難民も含め，15 万人以上の人々がイタリアに渡ってきているそうだ。また同年 4 月に起きたランペドゥーザ島沖難民船沈没事故も影響して人々の難民への関心は高まり，フィレンツェ駅の前には「難民の皆さん，イタリアへようこそ」という大きな旗が掲げられていた。難民問題が深刻化していく中で，それがどの程度の民意を反映しているのかはわからなかったが，やはりイタリアは寛容な国だなぁと思った。

街を歩くたびに観光客はもちろん，近所や生活圏でも外国人をよく見かけ，移民が多いのだと思っていたが，冷静に考えれば私も一時的な移民の一人であった。ほかの国もそうだろうが，一時的とはいえイタリアに公式に住めるようになるまでが非常に大変であった。イタリアでは居住許可証というものを必要とする。旅行以外の目的で入国した際に，現地での滞在を国が許可し発行するもので，指紋を含む個人情報が入った電子的なカードだ。入国前に申請するビザに加えてこのカードをもって初めて（私の場合は），正式に迎えられたことになる。周りの先生方は，「Burocrazia italiana（イタリア官僚制度）は立派なものだから，行政手続きは大変だよ。でも，生活が始まってしまえば住みやすい国だからね」と励ましてくださった。

4 月半ば，イタリアに到着してすぐ，必要な書類を集めた。移民の居住許可証に関しては外国人向けの書類だが，すべてイタリア語であって英語による表記は一切ない。書類を集めるのに，郵便局，タバッキ（コンビニのようなもの）などに立ち寄る必要があるが，英語が通じないことも多く，インターネットで翻訳したものを紙に書いて見せてコミュニケーションをはかったりした。さらに記入後その申請書類を提出するため，移民手続き担当の警察署に行った。移民手続き専門の施設であるが，ここでは英語を話すことのできる職員の割合がさらに減る。しかも大学の先生たちの「混むから早い時間に行くといい」というアドバイスを受けて午前 8 時ごろ到着したが，すでに，入り口の前から長蛇の列である。3，4 時間くらい並んで，やっと自分の順番が来た。書類を提出して，指紋を登録したらその日の手続きは終了。

8 月の終わりに日時を指定され，同じ場所に来るように言われる。人から時間通りに行っても間に合わないと聞いて早めに来たが，やはり私は長蛇の列の後ろに並ぶことになった。今回は，読む本も持ってきたので長時間待つことには耐えられそうである。と思いきや，待つのは構わないが，今回の担当部署は昼で終わってしまうという。時間内に列に並んでいても，時間が来ると窓口は閉まってしまうので，はらはらしながら自分の番号が呼ばれるのを待つ。ついに呼ばれると，やはり，指紋や身体の特徴を登録などして 15 分で終わった。

以上のプロセスをもってカードが発行されるのだが，手続きが終わったあと，「3 カ月後くらいにカードを取りに来てください」と指示された。待ち時間に備えて同じように本を持参したが，またしても本人確認をしてカードの配布というわずか 2，3 分の作業をするため窓口に呼ばれるまでに 4 時間列に並ぶことになった。滞在許可証を手にしたのは 11 月，私の滞在期間はすでに半分を過ぎていた。

＊　　＊　　＊

フィレンツェはあえて言うまでもなく観光都市であり，街中に土産物屋がたくさんある。特ににぎわっているのは中央市場を取り巻くようにある，露店の数々である。露店では，革製品やアクセサリーなどが売られていたりするのだが，観光客で非常ににぎわっている。観察してみると，店の人から呼び止められている

観光客や，旅慣れた人なのか値段の交渉をしている者もいる。冬は日が落ちるのが早く，街灯がオレンジ色で街全体の夜道は暗めなのに対し，このエリアは蛍光灯でまぶしく，いつでも活気づいていた。

中央市場では革製品を作る工房や店が隣り合って一つの通りになっており，それらの前に移動式の露店を構え，一つの露店商店街が成立しているようである。そういうわけなので露店も適当に並んでいるわけではなく，注意してみてみると，1年を通して同じ場所に同じ店が，そしてその店では同じ人が働いていた。建物や工房にはイタリア人もいるようだが，露店を出して売り子として外国人観光客に直接対応している人々は外国人労働者が多いイメージだった。こうして考えると，観光産業であるこれらの店は，景気などの影響を受ける可能性はあるが，外国人労働者にとって比較的安定した仕事を提供してくれる場であるのかもしれない。彼らは観光客を相手に，英語はもちろん，私が通ると，中国語，韓国語，日本語といろいろな言語で巧みに話しかけてくる。日本人だとわかると，当時流行ったお笑いのフレーズで呼び止めたりしてきた。私より彼らのほうが日本の流行に敏感で，その知識をマスターし活用しているようである。

あるとき，店員に仕事のことをたずねてみた。すると彼女は週6日働いているそうだ。オフは土曜日だけ。「明日も，明後日もここでやってるから，また商品が気になったら来てね」と言っていた。ほかにも，革ベルトを売っていた男性は，そこで働きながら大学院で経営学を勉強していると言っていた。自分も海外から来ているというのに，店にやってくるさまざまな国籍の客の言語や文化，最新の情報を理解し，「商談」している。夏は炎天下で，冬は冷たい風の中で，働く。前回の記事で述べたように，イタリア人にとっての余暇は非常に重要な要素を持つようだが，（おそらく）これでは本当に余暇を休息時間以外に活用することは難しいと考えられる。休み時間の意味合いが，ネイティブとノンネイティブでは違うように思えた。

＊　＊　＊

受け入れ先の先生の講義に出席していたとき，できるだけ学生さんたちの邪魔にならないようにしていたが，あるとき筆記用具を貸したことをきっかけに隣の席の学生と知り合うことができた。アルバニア出身で，働きながら大学に来ていた。彼女はアカウンティング（会計学）を専攻しているようだが，開発経済学の内容を母国の話に照らし合わせて授業を聞いていた。アルバニアからは49万6000人もの人々がイタリアに移住しており，110万人が移住するルーマニアに続き2番目にイタリアへの移住者が多い（2013年当時）。彼女も大学院進学とともにイタリアに渡り，1週間のほとんどを働きながら，フルタイムの院生が受ける授業に出ていた。年齢が近かったこともあって意気投合し，授業の後に自販機のエスプレッソをごちそうしあったり，彼女のオフの日には，街を一緒に歩き，カフェやジェラート屋に入っては各々の国の文化や歴史，経済について語らったりした。彼女は犬を飼っていて，街を東西に流れるアルノ川の傍らを散歩したりもした。将来は母国を離れ，海外で働きたいという。母国では女性の立場がまだ弱く，母親が海外で勉強することを強く望んだそうだ。そうした期待もあってか，仕事が夜に終わった後，深夜12時まで開館している図書館に籠って勉強していると聞いて，すごく励まされた。

＊　＊　＊

移住する側と移民を受け入れる側の立場の違いを考えれば当然かもしれないが，新しい言語や知識を身に着けることに貪欲な外国人と，イタリア語とイタリアのルール，そして限られた行政予算をもとに淡々と対応する窓口のスタッフ――警察署の移民窓口を挟んだ双方の雰囲気があまりにも対照的で非常に興味深かった。私の滞在は1年だったが，ここで会った人たちは居住に加え，就労の許可を得るため，毎年これ以上に大変なプロセスを踏む。彼らの寝る間も惜しまず勉強した努力が実を結び，イタリアに大きな利益をもたらすほどに高い技術や知識を身につけたとき，彼らは同じように12時間も並んで許可を求めるのだろうか。歴史と誇りのある国で，自国を大切にする一方で，急激に増えつつある移民に対する行政対応の問題の複雑さがある。移民問題は，このグローバル化社会において避けて通れない現象である。日本は海に囲まれ，そうした移動の自由さが少ないとはいえ，国境を越えた人々の移動が着実に増えつつある。英語を母語としない国がどう対応していくのか，イタリアを含めさまざまな国の事例から学んでいく必要があるかもしれない。

こむら・みづき　武蔵大学経済学部准教授。最近の著作に“Fertility and Endogenous Gender Bargaining Power,” *Journal of Population Economics*, 2013, 26(3), pp.943-961。労働経済学，人口経済学，公共経済学専攻。